
俺の姉は〇〇女優

永瀬俊幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の姉は。。。女優

【Nコード】

N3064R

【作者名】

永瀬俊幸

【あらすじ】

順風満帆に過ごしていた優樹（高校二年生）の両親が突然の離婚。妹 由香（中学三年生）は母親が、そして優樹は父親が育てる事になった。

半年後、兼ねてから不倫関係にあった人と結婚したいとゆう突然の親父の申し出。
もちろんそれを拒否る俺。

親父との話し合いで、『試しにお前が高校を卒業するまでの一年半
余りだけその人達と暮らそう。』

それでもお前が嫌なら父さん諦める！』と勝手に決めだす親父に圧
倒され渋々納得。』

『人達』ってどうゆう事や？と思いつつ、その日はそれ以上の追求
はよした。

???ここから物語がスタート。

新しい母親（候補）と、親父の謎の一言『人達』の片割れとの生活。

なに不自由なく育ってきた優樹が物語が進むにつれて修羅場を経験
していきます。

1 - A . えっ!?!この人が姉ちゃん?!? (前書き)

お楽しみいただけるかはわかりませんが、どうぞ宜しくお願いします。

1 - A .

えっ!?!この人が姉ちゃん??

親父のあの発言から二週間。特に変わらず毎日過ごしている。

??? 『学校』

周りの友達も最初はそれとなく気を遣ってくれてるのがわかったが今はまったくそんな事はない。

『優樹の新しいオカンでどんな人やるなあ!』

『どやるな?けどあのオトンの事やから相当綺麗な人なんちゃう? !』

??? いやいや、まだオカンになるって決まったわけやないし!!と俺は心の中でツツコんだ。

この最初に要らん事を言い出したのが圭、そのあとこれまた要らん事を言うのが拓。

圭『なあなあ、優樹はどう思ってるん?』

優『そんなんどーでもええねん!実際昔から不倫関係にあったとかどうせろくでもない女に決まってる!』

拓『えらいキツイ事ゆうな!???まあお前の気持ちもわかるけど、少しは優しくしたりいや?』

そんな事言われてもまだ離婚して半年ちょっとでの新しい母親候補にそんな気にもなれない。

圭『まあ、家が気まづかったりしたらウチきたらええよ!お前やつたらウチの家族も歓迎やろうし!』

拓『ウチも大丈夫やからな!オトン出張ばかりでほとんどうちに居てへんしな!』

優『???ありがとう。』

こうゆう時、友達には恵まれててよかったと心から思う。

拓『ただ、気掛かりな人は優樹のオトンの「人達」ってのが気になるなあ』

圭『もしかしたら、新しい兄妹とかできるんちゃうん？』

『姉ちゃんとかやったら紹介してな？』

優『せやな、女やったら紹介したるわ！なんやったら貸したるわ！』

とふざけ半分で圭の話しを終わらせた。

圭『まっなんかあんま元氣ないみたいやから、これ貸したるわ！』

と圭から手渡されたのは、最近おれがお氣に入りの売れっ子女優、結城 此花 の制服ものだった。

圭『最近、しおりちゃんとも会ってないみたいやし、今日はこれでスッキリしてゆっくり寝ろ！』

と妙に上からこられたが、素直にありがとう。と答えておいた。

しおりというのは、高一から付き合ってる俺の彼女。今の状況含め俺の事を唯一理解してくれる大事な彼女。

高一の終わりまでは同じ高校だったが、親の都合で今は新幹線で2時間ほどのところに住んでいる。

明日は休みだから思いっきり寝たろ！と思いながら家に帰る。

家の近くで親父に会った。

親父『おー優樹おかえり。今日ばちばち新しいオカン達来るから！じゃっ！』

と言いつ残し走り去っていった。

自分の親ながらここまで適当な事できるのはうちの親が高。純。くらいだとおもった。

家に入りなるとも言えない緊張感があつた。この馴染みの家に他人が来て、一年半ほど一緒に暮らすのかと思うとなんだか疲れてきた。こんな時は此花ちゃんでもみながらやってやるしかない！と借りたばかりのVを手を持ちベットにむかった。

テレビをつけDVDをいれた。そこには細いのに胸はあって、長い髪を揺らしながら悶える此花ちゃん姿がある。

俺は自分のをいじりながらこんな綺麗な人だったら姉ちゃんでもいいー！！

と叫びながらの昇天。

その瞬間、玄関先で親父と女の人の声が聞こえた。

あわててテレビを消す俺！！！！

家に1人だ！とわかっていたので、ヘッドホンもつけずになかなかの音量で鑑賞してた俺は、

正直、完全に焦った。いやむしろズボンを履いてない事にいま気づく。

と同時に親父が『優樹おりてこーい！来たぞお！』と汚い声で俺を呼ぶので、

『今降りるからちよい待つとけえ！』とこっちは汚い言葉で返してやった。

やはりいくら他人であまりよく思っていないとはいえ最初くらいはと思ひ、制服をまた着て、髪を整えた。

階段を降りていく途中、やたら香水のいい匂いがすり。

姿が見えたその人は親父より年は少し上に見えるが綺麗な人だった。女『こんにちわ。初めまして！』と深々とあいさつしてきた。

まさかの展開だったのであわてて『は、はじめまして、親父の息子の優樹です。』とあいさつした。

おんなの人はニコツとこちらに微笑みかけ、『よろしくね！』と言。

正直、変なばあが来ると思ってた俺には、予期せぬハプニングである。

そんな俺を見てなにを思ったのか親父が『お前は惚れたりしたらアカンぞおー！』とニタニタしたがらからかってきた。

心の中でドキッとしたものの、この親父は頭弱いんだからしょうがないと思う事で平静をたもった。

親父が『そうやあ亜樹菜ちゃんは？』と女の人に聞いていた。

『今、駅に着いたみたいだからもうすぐ着くみたいよ。』と答えた。俺は不意に『亜樹菜さんって？？』と親父に聞いた。

『ああ？亜樹菜ちゃんは陽子の娘さんや！お前の2つ上やって前にゆったやろ！』

聞いてへんわ！！むしろその女の人が陽子さんってのも今知ったくらいやわ！！

という当然の俺の叫びだが、抑えた。心の中で叫んでやった。三人でリビングに移動し、たわいもない話を始めていた時、

『ピンポン』とチャイムが鳴った。

『亜樹菜ちゃんや！優樹開けてこい！』と完全に上からの親父にイライラしながらも大人しく玄関にむかった。

向かう途中の廊下で俺は2つしか変わらない女がそこにいる！しかもこれから一緒に暮らすと考えるだけでドキドキだった。

ハッ！気づいてしまった。この家にはリビング以外に部屋は2つしかない！一つは親父と陽子さんが使うにしても俺の部屋は？？

俺は一体どうなるん？？

と考えがめぐっていたが仕方ない。

いまはとりあえずその亜樹菜とやらを迎えてやろうとドアをあけた。

『初めまして！亜樹菜です！宜しくお願ひします！』と深々と頭をさげている。

『こ、こちらこそ宜しくお願ひします。』

とあいさつしてる時なぜだか初めてピ。サ。に行った時を思い出す。お互いに頭を上げた瞬間、『ハッ！！！あなたは！！！！』

1 - B . 誰にも言えない事実！（前書き）

1 - B ・ 誰にも言えない事実！

まさに心からの叫びであった。

文字は消せるが言葉は取り消せません。昔なんかで聞いたフレーズだ。

そんな事が頭を巡ってる俺に対し、亜樹菜とやはら当然の疑問を投げかけてくる。

『えっ？！どつかで会った事ありましたっけ？！』

予想してたとはいえ言葉がでない。だがしかし、なにか返さなければ第一印象は完全に

変なやつ！になってしまふ。

それだけは避けたい。

それに目の前にいる彼女が人違いって可能性もある！

そうだ！俺はなにをうじうじしてるんだ！こいつは偽物だ！そうに決まってる！

『あのおゝ？』と彼女からの言葉がでた。

『いやあ普通に人違いでした！亜樹菜さん俺の元カノそっくりやったんで！』苦肉の言葉である。

『あっそうだったんだ！』 なんとか納得してくれたようである。

『なにしてんねん？はよこっちこい！』との親父の言葉で、俺達二人はリビングに向かった。

リビングでたわいもない話をみんなですしてる時も俺はソワソワだった。

やはり一挙一動が似ている。いや似すぎている！！あの笑顔、そしてあの脚の組み替え方！なによりあのこぼれんばかりの胸？

『いや絶対人違いや！期待しても無駄やで！』と囁く僕の中の天使たち。

『いやいや、あれは似すぎやで！ほんもんや！兄ちゃんもうけもんやん！』と悪魔の囁き。

『親父！ちよつと俺やらなあかん事あるから部屋戻ってるわ！』と言に残し部屋へ急いだ。

確認するのだ！もう一度この目で確認するのだ！

先ほどのDVDを再生し、今度は自慰のためではなく、刑事のような気持ちでテレビをみた！

なにかあるはずだ！この此花ちゃんと今下にいるあの女との共通点がああ！

悪魔の勝利である。もはやおれはそうであるに違いないと決めつけている。

いろんな角度から彼女の身体を凝視する。

やはり声はそっくりだ！間違いやはり奴はこの子に違いない！いや待て。証拠としてはまだ不十分だ！

もつと良く見るのだ！あいつは絶対こいつだとゆう証拠を探すんだあああ！

？？？完全にパニックである。

数分間パニック状態を楽しんだあと、これは！！とゆうものを見つけた。

それは彼女がバックの体勢になった時に見つけた。腰もとに2つ並んだホクロがある。

それだけではない左太もの裏に微かだが傷が見える！

やってやったぞ！俺はやってやったぞお！と両手を天高く突き上げた次の瞬間！

ボタンと俺の部屋のドアが空いた。

アワアワしながら俺は必死にテレビを消した。

そして扉に目を移すとそこに立っていたのは亜樹菜その人であった。

『急にごめんね。おどろいた？』と聞いてくる彼女。

『い、いや大丈夫やで？どうしたん？』とオドオドオドしてしまった。

『？？？いや、すごく言いづらいんだけど、？？？私の部屋ここなんだって。』

『へっ？』なんとも情けない声を出してしまった。いやしかし！そんな事より、じゃあ俺の部屋は？

『あー、そうなんや。じゃあ俺自分のもんまとめて出るからちよい待っててもらっていい？』

と紳士的な態度をとる俺に対し、亜樹菜は『いや、ここ2人部屋にしろって？？？』

ボタンっ！

俺はふいに階段を駆け下りていた。『クソおやじい！！』

リビングに入ると親父と陽子さんはこちらをきよとした顔で見ている。

『なんやねん！騒々しい！』とふざけた態度をとる親父に対し、俺は言ってやった。

『なんで亜樹菜さんとおれが同じ部屋なんだよ？！』

『ああ？しゃーないやろ！ほかに部屋ないねんから！それにこれから兄妹として生活すんねんからええやんけ！』

ああ？とはなんやねん！ああとは！と思いつながら自分がかに思春期真っ只中なのかをわかってもらおうと喋った。

『おれ今高2やで？今日び高2ってゆうたら性とかにめっちゃ興味ある時期やねんで！兄妹ゆうたかて血いつながってへんし、なんかの間違いで手だしたり？？す？？！』

！！！！！！『バカやろお！！！！！！！』親父の右ストレートが綺麗なおれの顔ををとらえた。

『お前と亜樹菜は兄妹や！って思え！昔から一緒に暮らしてた兄妹や！って思え！わかったか！』

？？？無茶である。だがしかしこれ以上親父を刺激しても仕方ないので大人しく部屋に戻る事にした。

『大丈夫だった？すごい音したけど。』と亜樹菜が心配していた。

『大丈夫やで。いつもの事やから。』と答えた。

いつの間にか外は暗くなっていた。
みんなでご飯を食べ、順番に風呂にはいった。

陽子さんの『私たちは最後でいいのでお2人先入ってください。』
がなければ最後に入って宝探してきたのに！と思いつつはいった。
先に部屋に戻りベットに横になってたらボタンっと亜樹菜がはいっ
てきた。

『ふうスッキリしたあ、久しぶりにお風呂だったあ』と1人では
しゃいでいる。

『よいしょ』と亜樹菜がベットに入ってきた。

『な、なにしてんねん！』と焦る俺に対し亜樹菜は

『しょーがないでしょ！寝るとここしかないんだから！』

なにも言えない俺に対し、亜樹菜は、『今日は疲れちゃったから寝
るね。明日いろいろお互いの事はなぞ。おやすみ』と先に寝てしま
った。

となりに女がいる！しかもめちゃくちゃ可愛い！そして疑惑がある
！胸あたってる！！

真相をどう確かめるかと考えつつその日は寝られなかった。

1 - C 神様からの試練（前書き）

この度は東日本大地震により被災された方々に心より謹んでお見舞い申し上げます。

この大震災を日本全国一丸となって乗り越えられると強く願っています。

連載遅れてすみません。

1 - C 神様からの試練

あくる日の朝、俺は目覚めた。時間は昼の11時。

完全に遅刻である。横に亜樹菜の姿はなかった。

携帯はやつらからの着信だらけ。

どんな奴らがうちにやってきたのか気になってるだけだろうと勝手に解釈して、学校を休む事にした。

『昨日はろくに寝られへんかったしな。』と呟き昨日の夜中を思い出した。

亜樹菜が『おやすみ』と眠った後、オレはベットから出て床の上に正座した。

この状況をもう一度整理したかったからである。

「今俺の部屋に此花ちゃんがある！いや違うやろおれ！赤の他人や！??? いやそれも違う。兄妹や！」

意味もわからず親父が連れてきたな！!? まあ俺も姉ちゃんほしかったわけやし!? なぁんも問題ないわけやし!? ま、まあ可愛い人やから俺が軽くビビってまうわけで、うちのにうちにいる気がしないだけであって??? 寝られへん。」

そう、俺は完全に意識しまくってるのである。そんな俺をよそに亜樹菜は爆睡である。

「こつちの気も知らんとようもまあ寝られたもんやな！今日初めてあったばっかやぞ！警戒心なさすぎんねん！」

寝ている相手には強気である。

ともかく俺に悩みの種ができたわけだ。それもかなりでかいやつな！!?

胸のドキドキが収まったわけではない。解決したわけでもないが、おれはベットに向かった。そう、眠いからだ！

となりに入ってみて改めてわかったこと。可愛すぎる。そしてシャンプーのいい香りがする。

その時である。亜樹菜がこちらに寝返りをつつてきた。と息が聞こえる。顔が目の前！そしてパジャマの隙間から谷間が見えている！！ムスコ大暴走寸前である。

その後もそんなこんなでムスコを鎮めるための闘いに大量に時間を費やし眠りに付けたのは朝方であった。

正座をときリビングに向かった。考えた結果、俺にはキャパオーバーなわけで考えてもむだ。流れに身を任せる事にしたのだ。リビングには誰もいなかった。

やっとゆつくりできると思った矢先である。

『おはよ！』と風呂場からでてきたのは亜樹菜であった。

『お、おはよ。』と一人ではないとゆう事の落胆で、から返事をしました。

『なんか元氣ないね？大丈夫？』とメチャクチャ可愛い事をゆつてきやがるもんだからオレは『大丈夫やで』と笑顔で答えた。先ほどの落胆なんてどこいく風であった。

『二人はなんか遊園地いくとか言つて朝でてったよ！帰りは夜になるから晩ご飯は二人でなんか食べるつてお金もらったから美味しいとこ連れてつてね！』

と、あのアホ親父はまた勝手な事をしやがる。

『あれ？てか学校はないの？』と聞かれおれは

『今日はなんか行く氣しなかったから休んだわ！』

とたまにある事をゆうと、でたよ！とゆわんばかりの顔で、

『学校はちゃんと行かなきゃだめだよ？青春の一番いい時なのに友達に会える時間潰してどうすんの？！』

『ご、ごめん。明日からはちゃんといくわ。』と軽く呆氣にとられたが答えた。

『そか！じゃあ今日はこの街を私に紹介して！』と言ってきた。

自分でゆうのはなんだがこの街には特に紹介できるような所はない。

『紹介するようなとこないで！』と素直に伝えたが、
『連れてけ！』とやけに威圧的な言葉に『は、はい。』と答える僕。
家の近くはほんとに紹介できるところがなかったので電車で15分ほ
どのそれなりになんでもある街にきた。

二人で歩いているのだが、通りすぎる男達はみんな亜樹菜を見てい
た。振り返るやつも多い。

等の本人はにこにしながら俺に、『ねえねえどこいく？どこいく
？』とまったく気になってない様子。

『なんかしたい事ある？』と聞くとショッピングしたいとの事だっ
たのでぶらぶら見る事にした。

すると亜樹菜は最近流行りの下着屋を見つけ『ねえ一緒に選んで！』
と思春期男子には恥ずかしい事を要求してきた！

『ほんまにゆうてんの？』とゆうと『いいから！』と手を引かれた。
すごく小つちやい手でもちもちしていた。

中に入るとセクシーな店員さんたち！そしてエロしか感じない下着
達！今この店に男はおれ一人！女は

ざつと見渡すだけでも20人はいる！まさにハーレムやん！？

とニヤニヤしてると亜樹菜はこれなんかどう？と見せてきたのは紫
と黒が入り混じったTバックであった。瞬時に俺の脳は亜樹菜がこ
れを着てるところを想像し、脳に焼き付けた！

『ええんちやう！似合いそうやな！』となんとかニヤけ顔を抑えな
がら答えた。

すると亜樹菜は事もあるうに『買って！』とゆつてくる。

オレはまだしがないただの高校生やぞ！3000、4000円も痛
いんじゃない！と心で叫んではみたが、見栄を張りたい自分がいて、『
ええよ！』と答えてしまった。『やった！ありがと！』と腕をぎ
ゅつと掴んできた。胸が当たってこれのまま時間とまれ！！と本
気で思った！

恥ずかしながらレジにもつていくと会計の時に、『可愛い彼女さん
ですね！』とゆわれなぜだか兄妹ですとは言いたくなくて、『あ、

ありがとうございます。』と答えた。

店を出ると外をでると外はもう暗くなってきた。

『今日はもう帰ろつか！』と亜樹菜がゆうので家路にむかった。

家に着きリビングでぐだぐだテレビをみていたら眠ってしまった。

すると亜樹菜の『起きて！』の声で目が覚めた。

『ご飯できたから一緒に食べよう！』と笑顔だった。

その言葉にバツと体を起こすとそこには美味しそうな料理が並んでいた。

『冷蔵庫にあるもので作ったからこんな感じだけど???ごめんね?』と滅相もござらない事をゆってきた。

『いやいや！めちゃくちや美味しそうやん！てか料理できるとか意外やな！』と答えると

『私だつて料理くらいできるし！』と軽くふてくされた後、

『今日は街にも連れてってくれたし、下着も買ってくれたし、そのお礼だよ』

ふいにオレはこの人が彼女だったら毎日楽しいだろうなと考えてしまった。

その後二人でご飯を美味しく食べた。笑顔で二人でご飯を食べながら今日の事を話したりした。

本当に楽しい。

片付けをしてる亜樹菜を見ながらおれはまたソファで寝そうになっていた。

すると二人が帰ってきた。

そしてリビングに『ただいまあ！』と親父の汚い声が聞こえた。

亜樹菜は『おかえりなさい！これ使わなかったので返します！』とゆっていた。

手にしていたのは今朝もらったとゆっていたお金だった。

ウトウトしながらその光景をみていた。

『ええよ！使わなかったなら亜樹菜にあげるから！』と親父はゆうが、亜樹菜は

『本当に大丈夫ですよ！このお金でまたふたりでどっか出掛けなよ！』と笑顔で親父の手に返していた。

それを見た途端、俺の睡魔が限界で眠りにはいった。

兄妹としてじゃなくこの人と出会いたかったな。と思いながら眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3064r/>

俺の姉は〇〇女優

2011年10月8日20時22分発行